
シュバルトの伝説

choro

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シユバルトの伝説

【NNコード】

N3924E

【作者名】

choro

【あらすじ】

シユバルトに伝わるある伝説。国乱れるとき、5つの魂が現れる。剣道の大会で優勝した直後に少女は異世界に飛ばされた。少女の使命とは何か？

プロローグ

（プロローグ）

物語は語り継がれる。

今ここに新たな伝説の1ページがはじまる・・・。

シユバルトに伝わる伝説

国、乱れるとき、五つの魂が現れる。

剣士の魂・賢者の魂・癒士の魂・探知者の魂、そして治者の魂。

剣士は剣を取り、戦い、賢者は知恵を出し、癒士は傷を治し、治者が国を治める、そして、探知者は彼らを見つけ出す。
彼らの体にはこの国の紋章が浮かび上がるといつ。

彼らはこの地に平穀をもたらす者である。

伝説どおりのことが過去に2回起きているといふ。
現在生きている者の中にこれを見たものはない。
しかし、証拠らしきことはある。
シユバルトの王家はこの2回の時期を境に血が大きく異なっている
といつ。

プロローグ（後書き）

最後まで書けるか不安ですが、がんばります！

1、剣士の魂

パン

「一本！」

竹刀が打つ音が響いている。

木乃森武道館の剣道場では、現在、剣道の全国大会が開催されている。

先ほどの試合は準決勝だったようだ。

ひとり大きな声援が飛び交う中、決勝戦が始まった。

「はじめ！」

審判の声がかかる。

このレベルになるとすぐには両者とも動かない、気迫のぶつけあいだ。

観客の注目は、眼下の試合、とりわけその片方の少女に注がれていった。

相手は男である。

この大会は力のあるものが登場するという形式のため、男女で対戦という図式が起こるわけだが、

決勝戦での対戦というのはこれまでに例のことだった。

自然、観客の注目も高まる。

だが、観客の注目しているのは試合結果だけではなかつた。少女自身の容貌である。

面をつけても、隠し切れない整つた顔、試合に集中してきりつと引き締まつた唇、凜とした立ち姿、

試合中はどの男性よりも凜々しく、試合に勝利して、微笑む姿は、

誰よりも可愛い。

そんな両極の魅力を持つ少女は、女子からは王子のように慕われていたので、男子が不用意に近づけば排除されていた。それでも隠れファンは数知れずである。

彼女の実力は折り紙つきだ。

祖父が居合いの範士、父が剣道の範士であるという彼女は、小さいころからその両方を叩き込まれた。

小学・中学と出場する大会ですべて優勝。

高校に入つてからもそれは変わることなく、これが高校生活最後の試合である。

そんなわけで、会場の観客たちは、昔から少女を知っているものが多い。

俄然注目が高まるはずである。

試合に動きがあつた。

男のほうが少女に切り込んだ。

すばやい動きであつたが、少女はそれを避け、一瞬のうちに胴を払つた。

パン

「一本！それまで！」

観客が沸き立つ。

相手に礼を取ると、少女はゆっくりと面をはずし、観客に向かつて微笑んだ。

「見つけた。剣士の魂を持つものよ・・・。」

観客に混じつて試合の様子を眺めていた男はそうつぶやいた。

髪の毛に隠れて顔は良く見えないが、年は20代中頃か。

風変わりな衣に身をつつんでいるのにまわりの人間は違和感を感じないのか平然としている。

男は少女が会場を出ると同時に席を立つた。

少女は更衣室へと向かつていた。

その視界の中に違和感を感じて少女は首をかしげる。

「さすが、気づかれましたか？」

目の前まで来ていた男がそう言葉を発した。

そうして少女は違和感の正体に気づく。

この男はなぜこんな格好をしているのか？

なぜまわりの人たちは平然としている？

「それは私がちょっと催眠をかけたからですよ。」

少女の思考を読んだかのように男が答える。

「私と供に来てください。正確には私は送るだけですが。」

「え？」

何を言われたのか判断できないうちに少女の周りに光が立ち始める。

「あなたの使命が終われば帰れますから。」

その言葉が終わるか終わらないかの内に、少女の姿は光とともに消えていた。

「頼みましたよ。我々の国を救ってください・・・」

目の前から消えてしまった少女に向けての言葉だろうか。

その声はどこか寂しそうで、真の願いが込められていた。

「さて、私が帰る方法を探さなくては。」

男の名は「ケ・ロイサー」。

彼の役目は王宮に仕える國一の賢者だといわれている老師の頼みで、

剣の魂を持つものを探して来いといわれ、

少女を送り届けることだった。

そう彼は、たつたいま自分の使命を終えたと思っていた・・・。

なぜ老師は自分を使わしたのか、なぜ自分が少女を見つけられたの

か、その意味することに彼はまだ気づいていなかつた。
しかし物語は動き始めたばかりである。

2、サイ・ノーズナー

ドサツ

「痛つたーい！」

声を上げたのは先ほどの少女である。

「もう何なのよ！ いきなりっ！ もし下が芝生じゃなかつたら大変だつたじゃない！」

現在少女がいるのは青々とした一面の芝生の上であった。

少し先には森が見える。

「つていうか、ここどこのよー！」

訳も分からず、知らない人に、いきなり知らない世界に飛ばされてしまった、少女の悲痛な叫びを聞くものは誰もいない。と思われた。

キーン キーン

何か金属がぶつかり合ひのような音とともに何かを言い争ひ男の声が近づいてくる。

「・・・ら・・・い・・だよー！」

「・んな・・お・・」る・・・し・べる・・・い・ん・だ・よー！」

「やうそ・・おと・しへ 殺されな。」

「殺す・・？」

何事かと目を凝らしていた少女の耳にその単語は飛び込んできた。

「殺すつて、えー！ ジャああの人殺されちゃつのー！」

殺されるの意味について考えていた少女はもつ田前にまでその集団が近づいていることに気づくのが遅れた。

「隠れないと・・。」

「お嬢ちゃん？ デニに隠れるって？」

下卑た笑いを浮かべた明らかに悪そうな男が可笑しそうに言つ。男たちの接近に気づいていなかつた少女は弾かれたように顔を上げた。

「うわっ、こいつすげー上玉でっせーお頭！」

その言葉に身の危険を感じた少女はとつとつと走り去つた。

「おれは男だ。」

「またまた～そんなこと言つて逃れよつたって、無駄だつ」少女と侮つていた男の言葉は最後まで続かず、少女の持つている棒らしきもので、叩き潰された。

「こいつほんとに男か！」

「何でも良い。2人とも殺してしまえ。」

お頭と呼ばれた男が口を開くと、男たちはいつせいに襲い掛かつた。完全に巻き込まれてしまつた少女の最大の救いは、こちらに来るときに一緒に持つてきてしまつた竹刀であつた。

そして彼女はつい先ほど剣道で日本の頂点に立つた人であつた。相手は真剣を持っているが、怯まずに打ち込む。

竹刀は的確に相手の急所を突いていく。

先に襲われていた男の腕もすごかつた。

剣舞を踊るように相手を倒していく。

かなり戦いなれているようだ。

少女の剣さばきならぬ竹刀さばきと男の力量に恐れをなしたのか男たちは「覚えとけよ！～」といつお決まりのせりふとともに逃げていつた。

後に残つたのは少女と襲われていた男だけである。

少女は考える。

男たちは盗賊か何かだろう。

しばらくこちらに居ることになるからまたこいつこいつことがあるかもしない。

男として通したほうが、身の危険は少ないだろう。

「お前、強いな。」

男が言った。

小麦色の肌に少し茶色がかつた黒い髪の毛、精悍な顔立ち。しかし、少しあどけたような口調だ。

「ありがとう・・といえбаいいのかな?」

半ばお前のせいだと思っていた少女は、少し言葉に窮する。「見たこと無い格好をしているな。先ほどの剣術もおれは見たことが無い。」

「せうかこの世界には無いのか・・。」

「?おれの名前はサイ・ローズナーだ。お前は?」

「わた・・いや、おれは来菅怜だ。」

「は?」

聞きなれない名前だつたのだろう。

「レイだ。レイ。」

「?わかつた。レイだな。よろしく!..」

「よろしく・・。」

「それよりお前ほんとに女みたいにきれいな顔してるな。髪も長いし。」

「おれが男だつて信じるのか?」

「だつてレイつて名前なんだろ?それに女は剣を習わない。」

レイは知らなかつたが、この世界でレイは男の名前であつた。

「サイでいいか?ここはどこだ?」

「お前この辺知らないのか?ここはシユバルトのマケシユだ。」

「シユバルトつて?」

「え?お前それも知らないの?どこから来たんだよ。シユバルトってこのはこの国の名前さ。」

「ふ~ん。」

「で、お前はどこに行くんだ?」

「え・さあ?知らない。だつてこの辺よく知らないし。」

「うへん、じゃあおれと一緒に来るか？案内してやるよ！つてもあれもこの国の人間じゃないけどな！それでもお前よりは知ってるし。」

「じゃあおお言葉に甘えて。その剣の腕なら安心だし・・・。」

「おうよ。そういうんのやつには負けないぜー！で、そいつと決まれば・・・」

「ちょっと待ってー今みたいなことまたあるよな？」

「うへん？まあ、しようちゅうだな。特にここ最近は国があれだしな。」

「国がどうかしたのか？」

「あ、いや・・・。」

サイは言葉を濁した。

何か事情がありそうだ。

レイはそう思つたが、まだこれが自分に関係のあることだと思わず、それ以上突つ込んで聞くことはなかつた。

「レイ、何かあるのか？」

「あ、うん。ここの人たち真剣使うみたいだし、わたし・・・いや、おれも武器が欲しいかなと。」

「あーそうだな。いくら強いつつても、その棒じゃな。そういうこ

となら、いい鍛冶屋を知つてるぜ。」

「おれの注文どおりに作つてくれるかな？」

「ああ、腕は確かだからな。よし！じゃあいくぞ。」

「うんー。よろしくお願ひしますー！」

レイはそう言つて、にこつと笑つた。

それを見たサイは驚いたような困つたような顔をしたが、その表情にレイが気づくことはなかつた。

レイとサイ。

これがふたりの出会いであつた。

今はまだ2人の旅はまだ始まつたばかりである。

2、サイ・ゴーズナー（後書き）

一応、恋愛が入ってくるはずなのですが・・・。
微妙です。

3、鍛治師のもとへ

「「「」だよ。」

そういうつてサイが連れて行つたのは、森の中にポツンとたたずむ一軒家だつた。

「じいー！帰つたぞー。」

「えつ、ここのサイの家なの？」

「いや、違つけど・・今だけ住まわしてもうりつてるんだ。あ、じいー！」

「おひ、サイか。お帰り。かわいいお嬢さんを連れてるじやないか。」

「じい、レイはお嬢さんじやない。これでも男なんだ。」

「は、はじめましてー。コスガ・レイと申します。」

「レイか。こい名じや。そつか二ヶが見つけたか・・・。」

「？」

「いや、こひちの話じや。わしの名前はウヨルコシトージや。よろしくお嬢さん。」

「あ～、だからお嬢さんじやなつてー。」

「やうかやうか。そういうことにじてやうひ。」

「うへん？まあこいか。それよりこひに何か武器をつくれてくれよ。」

「やうか、どんな武器をお望みかね、レイさん？」

「あ、えと、刀が欲しいんです。」

「刀とな？」「おー、レイ。刀つてなんだ？」

「やうか、この世界にはないんですね。でも、わたしが使えるのは・・・。」

「わたし？」

「あ、いや、おれが使えるのはこれだけだしな。どうしよう…。」

「それはどんな形かな。形さえわかれば作れるかもしれん。」

「えつと、形はこの竹刀と同じような感じです。それで、刃の部分なんですかけど、片面で…。ちょっと、紙ありますか？ 絵、描いてみます。」

そう言つて、レイが描いたのは細長い明らかに「J」の世界では見たことのない形をしたものだった。

「変わった形だな。こんな細くて大丈夫なのか？」

「うん。どうですか？ 作れますか、ウェルコットさん。」

「うむ、試しに作つてみようか。その竹刀とかいうものも貸してくれるかな？」

そう言つと、レイの描いた絵と竹刀を持って、奥へと消えた。

「Jの奥に作業場があるんだ。」

「やあ。そうだ、あれができたら立ち合つてトセー…使い心地など試すには腕のいい人とやるのがいいんですね。」

「ああ、おれでよければ相手になるぜ。」

「そういうえば、さつきここのサイの家じゃなって言つてたよね？」

「今だけ住んでるついで。どうこう」と…。」

「ん？ ああ、おれがJの国の出身じゃなことは話したか？」

「うん、最初に。」

「ほんというと自分がどこで生まれたのか知らないんだ。おれが物心ついたときにいた場所はずっと向こうのラケドット国だ…。そしてサイは語り始めた。」

4、サイの過去

ラケド国。

国土の大部分が山で森におおわれた国だ。

木が多いので林業でとても栄えている。

その国におれは山奥の小屋にタイラおじさんと住んでいた。

おじさんは付けなくていいといつので、おれはおじさんをタイラと呼んだ。

彼は剣の達人だった。

そして、いつか役に立つ日が来るからと、彼が知る限りの剣術を oreに教えた。

なぜだかわからないが、タイラは極力、人と関わらないようにしていた。

だから、ほとんどの食物は、自作だった。

着るものは年に一着買ひに行くがどうかといつといふだった。

タイラが自分の父でないことだけを誰に言わねずとも知っていた。

甘えてはいけないと……。

食事・畠仕事の合間はずつと剣の稽古だった。

数少ない服がぼろぼろになるまで稽古した。

おれの飲み込みが良かつたのか、7歳になるころにはタイラと同じくらいの強さになった。

「強くなつたな。」

そのとき一回だけタイラはおれを褒めた。

うれしかつた。

別れは突然訪れた。

心臓発作だつた。

その日も、剣の稽古をしていた。

タイラは突然胸を押さえてしゃがみこんだ。

おれは持てる力をすべて出し切つて、タイラを家まで運んだ。

苦しい息遣いの中、タイラはおれに語つた。

「すでに気付いていると思うが、サイ、お前は私の子ではない。

誰の子なのが知りたいかもしないが、お前の父・母を私の口から言ひことは出来ない。

そう約束した。お前が大人になるまで見てやりたかったが、私はもうすぐ死ぬ。

私がいなくなつたあとのお前が心配だ。ここで一人で暮らしていくのは大変だろう。

山を下りなさい。親のことが知りたかつたら旅をして、自力で探すんだ。

ただし、お前が親のことを知ることには危険が伴うんだ。

命を狙つやつが出て来るかもしれない。私の教えたことを忘れるな。

・・・それからもつ一つ・・・。」

少しだけ逡巡する様子を見せたあと、それを言つた。

「サイ、お前の本当の姓は・・・・だ。」

その一日後、タイラは亡くなつた。

おれはタイラがいればそれでよかつた。

両親のことを知りたいとは思わなかつた。

だから一人で暮らしていくつと思つた。

それはタイラが望んだことではなかつたけど、そうじょうと思つた。

だけビ子供が一人で暮らすには、山は厳しかつた。

山を下るしかなかつた。

おれは山を下りた。

町の人は親切で、おれは町の小さな宿屋に住み込みで働かせてくれたことになつた。

宿のおじさん・おばさんは、優しくて、とても良くなしてくれた。

平和だつた。

「のまま」で一生暮らしていくと想つていた。

おれは気付いていなかつた。

物陰から自分を見る目がある」と。

落ち着いた日々は長くは続かなかつた。

宿は何者かに襲われた。

襲撃は夜だつた。

最初に気配に気づいたのは、宿の主人であるおじさんだった。

だが、そのときにはすでにその口泊まつていた盗の半数近くが殺された後だつた。

おじさんにたたき起しきれたおれは、田の前で起きている惨状が理解できなかつた。

この人たちは何なのか・・・?

男たちの様子から誰かを探していることだけがからうじて分かつた。

危険だ。

頭の中で何かが、誰かが警鐘を鳴らす。

「サイ、逃げるんだーー。」

おじさんの顔にまつとした。

「あこつりお前を探してゐよつだ。」

確かに男たちは『ナビもまび』だーー。ヒロタに叫んでくる。

「ここにはおれだけだ。」

「お前が何で追われているか知らんが、お前はここ一生懸命働いてくれた。」

最近では本業の息子のよひ」・・。

「あー早く逃げなさいーー。おれたちが食に止めるからー。」

隣には二つの間に来たのかおばさんもいた。

「やつよー早く逃げてーー。」

男たちが近づいてくるのが気配で分かる。

猶予はない。

「いけっ！」

おじさんの言葉とともにおれは駆け出した。

肌身離さずもつていた剣だけを抱えて・・・。

背後で、剣戟の音がする。

宿のおじさんは昔、町の剣大会で優勝したといっていた。

きっと大丈夫だ・・・。

そう信じることで、戻りたい衝動を打ち消し、ひたすら走った。

5、サイの鳴

ピチュ　ピチチチ

鳥のさえずりが聞こえる。

朝かと思って、重い目を開ける。

空が緑だ。いや、空は青いはず・・・？

一瞬、自分がどこにいるのか分からなかつた。

だが、次第に思考を取り戻す。

そうだ、きのう襲撃にあつたんだ・・・。それで、逃げて逃げて、森に入つて・・・。

追つ手が来ていないと確認して、気が抜けた。

「それでそのまま寝ちやつたのか・・・」

サイは一人でつぶやく。

森の中で、追っ手が来ていないとはいっても、無防備にも朝まで目が覚めない。

こんなんでいいのだろうか？

良くないはずだ。

気を付けようとサイは心に誓った。

森の中に一人きり。

幸い辺りには果物がたくさんなっていた。

しばらくは飢えないで済みそうだった。

だが、これが尽きたら町へ行かなくてはならないだろう。

そこまでも考えてたどり着くのは、おれが町におりたら……。

おれのせいだ！おれのせいだ！

宿の人たちは、おじさんたちまつ……！

タイラの言葉を思い出す。

『命を狙つやつが出て来るかもしれない。』

あこつらはおれを狙つていた。確実に・・。

巻き添えだつたんだ、おじさんたちが。

後悔の念が渦巻く。

おれが山を下りなければよかつたんだ・・・。

けれど、どうかでその現実を受け止めきれない自分がいた。

本当に狙われていたのが自分だったのか？

ただの賊ではなかつたか？

いくら剣が強くて、おれはまだ9歳になつたばかりの子供もだつた。

受け止めるには重すぎる現実。

静かな森と時間の中で、宿での光景が繰り返しよみがえる。

そしてたどり着く先はいつも・・・。

『おれのせいだ

やがて食料が尽きた。

心に不安を抱えたまま、町へ行った。

食糧を得るために働く。

雇い主の人は皆いい人ばかりだった。

その点だけはおれは恵まれていたんだと思つ。

だけど、それは良かつたことなのか。

おれのいるところには賊の襲撃が起る。

そして、何人もの人が、おれがお世話になつた人が殺された。

どこの町に行つても同じだつた。

おれにはタイラに仕込まれた剣の腕があつたから、なんとか逃げ延びた。

そこまでされれば嫌でも思い知る。

おれが狙われてると。

おれのせいだ、みんな死んだのだと。

なぜ？なぜおれを狙う？

わからない。その理由をおれは知らない。

『お前が親のことを知るには危険が伴うんだ。』

危険が伴う。

きっとこれが理由だ。

親を知れば、なぜ狙われるのか分かるだろう。

別に親がどんなやつか知りたいわけじゃない。

おれを育てくれたのはタイラだ。

なぜ狙われるのか知りたいだけだ。

おれは親探しをし、各国を転々とする」となった。

12歳のときだつた。

おれは「一ズナ」姓を名乗る。

タイラに教えてもらって本当の姓を知ったが、素から名乗る気はないかった。

おれはタイラの子だ。そりゃ細川から。

そして、狙われるのが親のせいだというのなら、本当の姓を名乗ることは死に直結していた。

ひとと

暗い。思いのほか暗くなつてしましました。

この話がシリアルスラッシュに向かってる気がして怖いです・・・。

- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -

6、夕食と歓談

「それで、今いるのがここってわけ。」

なんでもないような顔をしていろが、話の内容はとんでもない。

会ったときから、明るくて、全然そんな事情を感じさせなかつた。

でも、確かにあの剣は戦い慣れしているといつ感じだつた。

あつと、ついこじとがたくさんあつたに違ひない。

それをすべて受け止めて彼の今の姿があるのだ。

強い人だ。

レイはそう思つた。だが、

「今の話、おれが聞いても良かつたのか？」

そうだ。サイは命を狙われているのだ。

まだ知り合つて何時間しかたたない私に話してよかつたのかとレイ
は不安になる。

するとサイはニカツと笑つて言つた。

「ハリハリ経験してるんだ。人を見る眼は確かだぜ？おれはレイを信用できるやつだと思つた。」

サイの言葉にレイの心はほわっと温かくなつた。

「じゃ、次はレイの話しな。」

サイが言つ。

「といつても、何話せばいいのかな？」

「そうだな。あ～そうだ。お前、この辺のこと全然知らなかつたじやないか。どこから来たんだ？」

そう聞かれて、レイは戸惑つた。

果たしてサイは自分が違う世界から来たなんて信じてくれるのだろうかと。

こっちに来たと思ったら、殺されかけて、サイやウェルコットさん
がいい人なので、

安心してしまっていたが、ここは異世界なのだ。

でも・・・、知らない世界のはずなのに、なぜか馴染みがある。

それに、さつき戦ったときも、体が自然と動いていた。

殺しが日常とまでは言わないが、ありふれた世界なのに、動搖せずにやつこつものだと、受け入れている自分がいる。

不思議な感覚だった。

「レイ...どうかしたか？」

サイは、見ず知らずの自分に自分のことを正直に話してくれた。

だから、私も正直に話してみよう。

レイはやつて口を開いた。

「おれは・・・」

「おーいーおふたりやんー」

レイの言いかけた言葉はウホルコッシュの言葉によつて、中断された。

「あ、ウホルコッシュ…ビリですか？」

「うむ、何しろ見たことのない形じやからな。もつらしかかつて
じや。すまんの。」

「こえ、じうちが無理なお願いしてゐるですから、仮にしなこでく
ださー。」

「わんわん、夕食の時間じや。」

そうにわれて、あたりが暗闇に包まれ始めて、ついでに始めて気づく。

随分、話し込んでいたようだ。

「うわー、もうこんな時間だった?」

「あれ?ほんとだー」気づかなかつた。」

レイヒサイは口々に叫んだ。

「夕食は出来とるよ。」

ウホルコッシュの言葉に、腹の虫がさわぐ一人だった。

夕食を食べながら、改めてレイは、自分の身に起きたことについて話していた。

サイに続きを促されたのと、ウホルコットにも聞かれたためである。

「それで、試合が終わって、廊下を歩いていたら、変な男の人に送るとか使命とかいわれて、サイに逢った場所に落ちました。」

「そうらしいです。」

「ところが、レイは」いつの世界の人間じゃないってことか？」

「それにしてもお前、結構強かつたな。見たことない剣だつたけど。どうしてやつたんだ？」

「さつものは剣道。それは父に教えてもらつて、あと、じいちゃんに居合いといつのを。」

「じいちゃんは強くて、まだ勝てたことないんだ。」

「剣道、居合い・・・聞いたことないな。レイの世界の剣術か。」

「やうなるのかな？でも、サイが使つてたみたいのも、知つてる

よ。日本じゃないけど。」

「 もしゃ、レイさんのねじこさんは、カイといつや前かな? 」

話を聞きながら何か考え込んでいたウホルコットがレイに問へ。

「 いえ、じじあまは清徳です。あ、でも畠おじこあまがそんな名前
だつたような・・・。 」

レイが答えると、「ふむ。」と、また考え込んでしまった。

「 どうかしましたか? 」

不安になつたレイが問うが、「なんでもないよ、心配しなさんな。
と言われてしました。

「 それよつ、レイさん。しばらへりて滞在なや。 」

話をすりぬけながらウホルコットは聞つたが、それはレイにとってか
なり重要な問題だった。

なにしるレイはこの世界にこのサイとウホルコット以外に知り合ひ
がいないのである。

つまり行くところがない。

「の母じ由はあつがたかった。

「アハーッ。

サイもわいづいたので、レイせむ葉に甘くした。

7、癒

レイは湯殿に浸かっていた。

しづらいのにこいつも良いところでもらえたので、よかったです。

それともやつ取りを思い出しつつ、レイはクスッと笑いをもらす。

「レイ、一緒に入るわ。」

ウホルコッシュちゃんの「レイちゃん、お風呂先に入つてくださいね。」と
いつ言葉に甘えて、

「はい。」と頷いたところにかかったサイの一言だ。

かなり驚いた。

「男同士なんだし別にいいだろ? お湯も少なくてすむし。」

そう言わわれては反論ができない。

だが、サイには男だといったが、実際、レイは女なのだ。

「どうしたものかと困つてゐると、助け舟を出してくれたのはウールコットだった。

「いや、サイ。知り合つたばかりで裸のむき合ひをしきりにいつのは酷じゃないかの？」

もしかしたら、見られたくない傷とかもあるかもしれないしの。」

「うへ、どうだレイ？」

サイに問われる。

サイがいい人だといつのは分かつてゐるが、それに女だといつのもサイにならばれても構わない。

・・・が、一緒にれるかといつたら無理だ。

「一緒にしようと無理かな。」

田に一杯の懇願をこめてレイは言つた。

「まさか、一緒に入るうんていつと思わなかつた。」

森の中の一軒家にしては広い湯殿にレイのつぶやきが響いた。

体を洗おうと思つて、ふと気がつく。

「あれ?」この痣みたいななんだか……?」

左肩のあたりに何かの模様のよつた痣が出来ていた。

洗つても落ちない。

こつちに落ちたときにぶつけたのだろうと、模様の意味を深く考えず、「レイは温かいお風呂を満喫した。」

お風呂から出ると、服が用意されていた。

サイが着ていたよつた服だ。

麻の生地、襟元や裾、袖に刺繡がしてあって、風通しがよさそうだ。

男物なのか刺繡の柄は可愛らしこものではなくにけれど。

その服に袖をとおすとやはりサイズが少し大きかった。まあ仕方ないだろ?。

「お、結構似合つた!」

服を着て、部屋へ戻るとサイが言った。

「ちょっとサイズが大きいけど……。」

レイが答える。するとサイがあきれたように言った。

「それ一番ちいさいサイズだぞ？ まあ、女みたいに細っこいから仕方ないか。」

それにして、お前の服変わったやつだよな。あんなの着て動きにくくないか？」

「うーん、考えたことなかつたな。それが当たり前だつたし。それに普段は違う服だよ？ あれは試合用。」

そう指摘されて、あの袴が余り機能的でないと気付く。

「やうか。いざれにしろ、あの服じゃ立派すぎるからな。明日、お前に合う服買いに行くぞ！」

隣でふたりのやり取りを聞いていたウェルコットは楽しそうに頷いていた。

翌日、朝食を終えたサイとレイは、市場に来ていた。

色とりどりの野菜や果物を並べた店、干し肉を店先に吊るしている者、身を飾り立てる装飾品を扱う店・・・。

様々な店が軒を連ねていた。

人もそれなりにいて、結構にぎわっているようだ。

「えへっと、服屋は・・?あれだ。」

やつ言いながらサイはレイをビンビン引っ張つていぐ。

レイはとこりと、なじみの無い風景に田舎をパチパチとさせっこる。

「ここに合う服が欲しいんだが。」

店には、サイや今のレイが着ているような服が並べられていた。

裾が広がったものもある。

「はい、お客様。こちらなどはいかがでしょ?。」

サイに答えて、店主が取り出したのはかわいらしい刺繡の施された裾の広がった服だった。

「そいつは女物じゃないか。こいつは」「見えて男なんだ。」

サイの言葉で、その裾の広がった服が文物だとレイは知った。

「にしむ、じちりに来てから男の人しか会っていなかつたのだ。

「へえ、旦那さまでしたか。これは失礼致しました。それにしても、きれいなお顔で。」

「ありがとう。」

レイは少しばかんでお礼を言った。

その表情を見て、サイは奇妙な感覚に襲われたが、店主が声を掛けたのですぐに忘れてしまつた。

「少し、小振りな方ですから、これはどうでしょう。」

店主が次に差し出したのは、袖や裾に紐がついていて縛れるタイプのものだつた。

「ああ、これなら多少大きくても大丈夫だな。レイ、これにするか？」

「うん、いいんじゃないかな。」

レイが同意を示すと、サイは店主に言った。

「じゃあ、これを。そうだな、出来れば柄違いつかで、3枚くらいあるかな？」

「もちろんでござります。ありがとうございます。」

サイが代金を払い、ふたりは店を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3924e/>

シュバルトの伝説

2010年10月12日05時17分発行